「D市七月叙景㈠」論

―「満洲日報」を視座として―

安福智行

はじめに
一、題材としての「満洲日報」
二、「満洲日報」の性格
三、「D市七月叙景㈠」とは
おわりに

「D市七月叙景㈠」は、これまでの研究においては「青年の正義感、現実批判」が描かれている、或いは「満鉄が支配する国際都市大連の特質」を描いたもの、という捉え方がなされてきたが、それらはいずれも作者のいわゆる〈満洲体験〉を背景にした捉え方であり、その創作資料についての言及はされてこなかった。本稿においては、この作品が「満洲日報」という新聞の記事を題材としている点を明らかにし、更にその「満洲日報」の性格などを視野に入れながら、〈満洲体験〉が作品成立のきっかけであった可能性はあるが、その内実は、あくまでも資料を元にして成立した作品である事を証明したい。

はじめに

中島敦の「D市七月叙景㈠」は、昭和五年一月に発行された「校友会雑誌」三二五号に掲載された作品である。これまでの所、この作品を単独で取り上げた研究は管見の限りでは見当たらず、「中島敦の一高時代の作品について」といった形で、他の作品と共に論じられている程度であるが、その中では主として二つの見方がなされてきた。

・中島はその悲しさを共にしている。彼らの運命の何たるかを知っている。彼らの上に、中国の現実の姿、その宿命を見ているといってよい。むろんここでも、中島は直接彼らの上に同情の言葉を吐いてはいない。つき離しての「叙景」に終始している。しかし、「一」を読み「二」「三」と読み終るとき、その三様の人間像の対比から、冷静な筆致の蔭にある青年の正義感、現実批判の姿勢を見出すのは容易である。とり合せの意識がそのまま現実批判なのだ。(一)

一つは、佐々木充氏などの「現実批判の姿勢」が見える、とするものである。そしてもう一つは、鷺只雄氏などによる、D市こと大連という都市の特質を明らかにした作品である、とする見方である。

・そういう中で、王様は、社史に名を残そうと虚名を求め、社員は不安な安定にすがり、苦力は無銭飲食をして叩き出され、明日なきまどろみの中に束の間の充足を求めるというふうに、いずれもドッシリと根を下した安定とは無縁の、綱渡りのような生活、内に常に崩壊と転落の危険をはらんだありようがその特徴である。

そこに満鉄が支配する国際都市大連の特徴を見たのがこの作品である。(二)

このような二通りの見解があるのだが、その背景にあるものは同じである。佐々木氏、鷺氏の論文中には、次のような文が見える。

・それから、京城・大連という街に住んでの異民族体験とみずからの日本人であることへの考察から出てきた、おのずからともいえる〈現実批判〉の態度、(傍線は引用者、以下注記が無い限り同じ)(佐々木氏)

・幼少時における異民族体験、植民地体験が中島に人間あるいは世界の不条理性への認識を深めさせる重要な契機となり、その一つの反映が「巡査の居る風景」「D市七月叙景㈠」に表れているのにすぎない(鷺氏)

このように、作者の「異民族体験」「植民地体験」が、その背景にあるのである。勿論、そういった体験が、この「D市七月叙景㈠」などの植民地を舞台にした作品成立の契機になった可能性は大いにあるだろう。

しかしながら、果たしてそれだけでこの作品が成立したといえるだろうか。本文を見ていくと、何らかの資料に拠っていると思われる箇所があるのだが……

一、題材としての「満洲日報」

この作品は、全三章から成り、それぞれの主人公は「M社総裁のY氏」「M社社員」「荷揚苦力」となっているが、まず注目されるのが、「M社総裁のY氏」が主人公の「一」である。この中には、「辞任の挨拶の草稿」と題して、次のような文章がある。

・――社員諸君。本日諸君の御来集を願ひましたのは、今回の政変により、私が不日現職を辞退致す決意を致しましたことを諸君に申しあげ、併せて、在任中諸君が不肖私に対し御与へ下さった御信頼と御精励とに対し、深厚なる感謝の意を表したいが為であります。――

・――諸君。現下の日本の経済的行詰りと社会的不安とを救済するものは満蒙の産業的開発を以て最捷径とするものであります。而も、この大事業の根幹をなすものは我がM社であるとは、私の久しき確信でありましたので、私は応分の覚悟と期待とを以て、此の地に赴任致した次第でありました。然るに実際について親しく社業を見るに及んで、私は遺憾ながら我社の営業振りが、所謂半官半民の組織なるため、ややもすれば官僚的通弊に陥り、社員諸君の気分も又、之を内地に比して稍々弛緩せる状態と見ましたので、就任劈頭、先づ実務化、経済化を高調し、昨年度の予算に対しては合計六百万円に上る大削減を断行して社内の反省を求めたのであります。――

・――又製油に於ては、第一期の「オイル・セール」は既に着手しましたが、第二期の計画としては低温乾溜と石炭液化の方法を研究中でありまして、今日では、之等も、もう、余程具体的になって居るのであります。特に石炭の液化は我国の経済国策上重大な関係をもつものでありまして、一噸の石炭を半噸の油に液化するのでありますから、我国の需要高たる百五十万噸を製するには、三百万噸の石炭を用うれば足りるわけで、撫順の如き炭坑を有するのは真に我国に与へられた天恵の資源と見るべきであります。――

・――要するに、根拠なき消極論や悲観説や退嬰主義は捨てねばなりませぬ。而して、我が国情は外にも内にも飽くまで積極方針を貫く覚悟を必要とするものであります。

終りに臨んで、私の諸君に希望致したき一事は、我

がM社の国家的使命と国際的地位とに就いて諸君が一層自覚留意せられて、我が社の満蒙に於て有する特殊使命を全うすべく努力せられんことであります。即ち、今や中国は国民革命進行の途上にあり、ソヴィエット・ロシヤの国情も全く安定したとは謂ふことが出来ません。此の不安なる両国の間に介在する満蒙の地は恰も大戦前のバルカン半島の如くに国際平和に対する脅威の中心地帯をなすといふも過言ではないのであります。吾々は帝国のため、世界平和のため、進んで此の地の治安と秩序維持の責に任ぜねばなりません。国民的統一と利権の回収とに熱中のあまり、兎もすれば排外的となれる中国国民並びに東三省官民の言動に対しては、諸君がよく先進国民たるの襟度を示して、飽く迄も寛容を持すると共に、その分を知らざる驕傲の態度に対しては深く之を警め、我が権益の守るべきは之を固く守って、中国国民が信を列強に失ふことを避けしめねばなりません。（「うまい、全く、うまいものだ。」とこゝで、彼は、ほと〳〵感心した。）

又ソヴィエット・ロシヤに対しては諸君はその国体を異にし国策を一にせざる所以を十分に自覚しつゝ、しかも之と相提携して北満並びにシベリヤに経綸を援けつゝ満蒙及びシベリヤの豊富なる資源を開発するこ

とは、我国の永久重要政策であります――

このように、「辞任の挨拶の草稿」はかなり長いものであり、「一」において相当の分量を占めている。

では、果たしてこの文章は、作者の創作といえるだろうか。主人公Y氏のモデルが、昭和二年七月から昭和四年八月まで満鉄総裁であった山本条太郎であることは既に指摘されており、又、鷺氏は前掲の論文で原田勝正氏の『満鉄』（昭和五六年十二月・岩波新書）、松岡洋右氏（山本総裁当時、副総裁）の『満鉄を語る』（昭和十二年五月・第一出版社）を引用して、山本総裁の時代に、「オイル・セール」等の政策が実際に行われた事を指摘している。何らかの資料に掲載された山本総裁の言葉を引用した、と考える方が妥当ではないだろうか。

では、どのような資料を引用したと考えられるのか。ここで注目されるのが、「満洲日報」という新聞である。明治三八年に創刊されたこの新聞は、「満洲の代表的新聞」（『日本新聞年鑑・昭和五年版』昭和四年十二月・新聞研究所）として、大連をはじめとする満州だけではなく、日本国内でも発行されており[三]、満洲に関する情報を得る為の、身近な手段であったと考えられる。そして、この新聞の昭和四年七月二三日付夕刊（これ以降、月日のみとする）に、「満鉄を去るに臨み／正副両総裁の挨拶」と題して、山本

総裁・松岡副総裁の挨拶が掲載されている。それを見てみると、「辞任の挨拶の草稿」が、ここから語句も殆どそのままに引用されている事が分かるのである。それでは、内容を挙げてみる。（傍線は、本文と異なる箇所）

・本日諸君の御来集を願ひましたのは今回の政変に依り私が不日現職を辞退致す決意を致しました事を諸君に申上げ併せて在任中諸君が不省私に対し御与へ下さった御信頼と御精励とに対し深厚なる感謝の意を表したい微意からであります。

・現下の日本の経済的行詰りと、社会的不安とを救済するものは満蒙の産業的開発の他なく、而も此大事業の根幹を為すものは我が満蒙であるとは、私の久しき確信でありましたので私は応分の覚悟と期待とを持つて赴任致した次第でありました、然るに実際に就て親しく社業を見るに及んで私は遺憾乍ら、我が満鉄の営業振りが所謂半官半民で甚だ放漫であり、社員諸君の気分も亦少らず弛緩せる事を発見致しましたので、就任劈頭先づ実務化経済化の大方針を掲げ、昭和三年度の予算に対しては合計六百万円といふ大削減を断行して、諸君の反省を求めたやうな次第でありました。（実務化経済化[四]）

・又製油に於ては第一期の「オイル・セール」は既に着手しましたが、第二期の計画としましては低温乾溜と石炭液化の方法を研究中でありまして今日では是等も、もう余程具体的になつて居るのであります。特に石炭の液化は我国の経済国策上重大な関係を有つものでありまして一噸の石炭を半噸の油に液化するのでありますから我国の需要高たる百五十万噸を製するには三百万噸の石炭を用うれば足りる訳で無順の如き炭礦を有する以上所謂天恵の資源とも見るべきでありませう。（三大工業計画）

・要するに根拠なき消極論や悲観説や、退嬰主義は捨てねばなりませぬ、而して外にも内にも飽く迄積極方針を貫く覚悟が必要であります。（鉄道事業敷設）

・終りに臨んで私の諸君に希望致し度き一事は、我が満鉄会社の国家的使命と、国際的地位とに就て、諸君が一層自覚留意されて我社の満蒙に於て有する特殊使命を完ふすべく努力せられむことであります。即ち今や中国は国民革命進行の途上にあり、ソウエートロシアの国情も亦安定したとは言ふことが出来ませぬ。此不安なる両国の間に介在する満蒙の地は、恰も大戦前のバルカン半島の如くに国際平和に対する脅威の中心地帯を為すといふも過言ではないのであります現に両国は東支鉄道の問題を中心として今や危うく干戈を交へ

んとしつゝあります。吾々は世界平和の為進んで此地の治安と秩序維持の責めに任ぜねばなりませぬ。国民的統一と利権回収に熱中せるの余り兎もすれば排外的となれる、中国国民並びに東三省官民の言動に対しては諸君が能く先進国民たるの襟度を示して飽く迄も寛容を持すると共に、其分を知らざる驕傲の態度に対しては深くこれを警め我が権益の守るべきは固くこれを護つて、中国国民が信を列強に失ふことを避けしめねばなりません。ソウエートロシアに対しては諸君はその国体を異にし国策を一にせざる所以を十分に自覚しつゝ然もこれと相提携して北満並にシベリヤの豊富なる資源を開発することは我国の永久重要政策であることは論を俟たぬのでありますが、（満蒙権益保持）

このように、所々異なる所も見られるが、いずれも語句が多少異なるだけで内容は同じといってよく、一字一句全く改変せずに引用するのはさすがに憚られて、多少改変した、という事以上の意味を見出すのは難しい。

これにより、「満洲日報」が、「D市七月叙景㈠」の題材であると考えられるのだが、更に両者の比較を進めていくと、「二」「三」も含め、「辞任の挨拶の草稿」以外にも、「満洲日報」の記事を参考にしていると考えられる箇所が存在するのである。

まず「一」から見ていくと、次のような場面がある。

・「どうもK時報は、いかんやうですな。」

「え？」

「どうやら、あの重大事件のことを又誇張して書いとる様です。」

S理事の云ふ所によると、何でもその支那新聞は大きく（ママ）号の見出しで、有名な昨年の事件のことを書いてその下に、又しても例の打倒日本帝国主義を附け加へて居るのだといふのである。

この場面の参考資料と考えられるのが、八月十八日付朝刊の「排日紙『醒時報』／捏造記事を掲ぐ／附属地では発売禁止」という記事である。

・奉天の排日紙醒時報は本日の紙面より「日本人張作霖謀殺」と題する見出しの下に張作霖氏の爆死は日本の謀計なる如く捏造し猛烈なる排日的文字を羅列し今後連載することゝなつた

続いて、記事を参考にしたと考えられるのが、次の場面である。

・それから、キチンと畳んであつた卓の上の朝刊を膝の上に拡げた。

「ポクラニチヤ附近に於ける露支の抗争。」「王正廷氏の日本に対する弁明。」「北満邦人の引上。」「M社線に

並行する支那鉄道敷設計画。」そして最後に、あらゆる方面から、かってなかった程の不評を蒙ったT内閣――それは彼を現在の此の地位に用ひた――の瓦解後に於ける後継内閣の迅速な成立。

まず「ポクラニチヤ附近における露支の抗争。」については、七月二一日付朝刊の「ポクラニチナヤ地方で／露軍遂に放火を浴す」という記事などが参考にされたと考えられる。この附近での両国の抗争についての記事は、この後も何度か掲載されており[五]、それらの記事を集約してこのような見出しを創作したのであろう。

次に「王正廷氏の日本に対する弁明。」は、七月十四日付夕刊の「日本の同情ある／態度を切望す／日支改訂交渉について／王氏が芳沢公使に」という記事を参考にして創作したと考えられる。

続いて「北満邦人の引上。」については、七月二一日付夕刊の「北満在留邦人に／引揚を命令／露支関係険悪のため」や、七月二三日付夕刊の「北満居留邦人に／引揚準備を命令／八木総領事に訓電」という記事が参考にされたと思われる。

更に「M社線に並行する支那鉄道敷設計画。」については、六月九日付夕刊の「満鉄線に対抗して／支那各線盛に画策／連絡会議を開いたり、運賃を引下げたりして／貨物の吸収に努む」、八月六日付夕刊の「新鉄道敷設計画／東支南部線と扶余間」、八月八日付夕刊の「運賃を低率にして／満鉄線と競争せん／吉海、瀋海、北寧三線連絡会議／具体的草案を決定」といった記事が参考にされていると考えられる。

そして最後に、「あらゆる方面から、かってなかった程の不評を蒙ったT内閣――それは彼を現在の此の地位に用ひた――の瓦解後に於ける後継内閣の迅速な成立。」は、七月四日付朝刊の「大命拝受から五時間／民政内閣成立す／即夜八時廿分親任式／興味多き閣員の顔触」「空前の短時間で／生れ出た新内閣」といった記事を参考にしたと考えられるだろう。

以上のように、この朝刊の見出しについては、それ程語句が一致している訳ではない。あくまでも〝参考にしている〟というレベルである。

そして、「一」の最後の場面も、新聞記事を参考にしていると考えられる。

・「あの、市の陳情委員の方が見えられましたが。」

「イヤ、駄目、駄目、そんなものは。」と、彼は乞食でも追払ふ様に右手を烈しく振ると、その時、丁度、同じ扉口からはいって来たM秘書官をつかまへて云った。

「君。また来よつたんぢやとよ。此の間の奴が。どうも仕方がないな。D遊園を民間に払下げろちふんぢや。」

そのDといふのは、今、M社で管理して入場料をとつて、入れて居る小さな公園で、一月計り前から、それを一般に解放する様にとの運動が此の市の中に起つて居た。それを云ふのであつた。

・「いくら民間に渡しても、すぐにあんな奴等に占領されて了ふんぢやよ。みんな苦力共の寝場所になるんぢや。少しも民衆のためになんぞなりやせんのぢや。君。」

この場面の参考になったと考えられるのが、第一に八月十四日付夕刊の「娯楽施設を完備した／大連遊園地の計画／電気遊園の無料貸下げを受け／資本金二百万円で」という記事である。

・今回柴田一郎、田中宇一郎、今井行平、小川慶次郎、竹中照蔵等四十三名発起人となつて大連市民を更新に生活へ導き活躍の意気を涵養する娯楽機関を設け思想善導を基礎に置く民衆慰安の設備をなして厳寒の節と雖も市民一般老幼男女が嬉々として相集ひ室内運動の出来るやう資本金二百万円で商事会社を組織し現電気遊園地の無料貸下げを受け大連遊園地を創設すべく計画を進めてゐる

そして第二に、八月十六日付夕刊の「電園附近の／遊園地計画不要／満鉄当局は反対意見」という記事である。

・仮に日本人支那人に対する施設計画を樹てゝも俗悪なものは寧ろ日本人に迷惑で結局中流以下下層支那人に占領される位なものである、大連居住支那人の大部分は有産階級の資本でなく日支人に使用される店員乃至使用で万全の施設として見たところが落ち度は至極少く結局苦力階級の集合となつて公衆衛生上から寧ろ憂慮すべき問題を招致する位に過ぎまい

以上、「一」において「満洲日報」の記事を参考にしたと考えられる場面を、記事との比較も交えながら見てきた。その結果、「辞任の挨拶の草稿」をはじめ、大部分において「満洲日報」の記事に依拠している（その度合いに差はあるが）という事実がここに見えるのである。

続いて「二」について見ていきたい。この章は「一」とは異なり、「満洲日報」に依拠する割合が少ないといえる。その中で、記事を参考にした可能性が考えられるのが、前半の海水浴の場面である。

「満洲日報」を見ると、六月十八日付夕刊に「傅家庄真砂浦に／満日海水浴場特設／家族連れの聚落にふさはしく／桃源台より自動車、馬鉄で連絡／来る廿三日から開場」という記事があり、その後六月二三日の開場までは、連日この海水浴場に関する記事が掲載されている。そして、本

文中に「赤い屋根緑灰色のギザギザの屋根の壁も一面に蔦が青々とからんで居て、窓毎に蝿除けの細かい網が張られて居る夏だけの小さな、貸別荘であつた。」という一文があるが、六月二一日付朝刊には、「簡易避暑家屋も提供」という記事があり、その建設中の写真も掲載されている。その後、六月二四日付夕刊にも、この「簡易避暑家屋」の写真は登場し(七)、六月三十日付朝刊には、「満日浴場の／簡易避暑家屋／安心して寝泊りが出来る／愈よけふから開く」という記事がある。

確かに、語句を直接引用している、といった関係は見られないが、海水浴場に関する記事は多く見られる。従って、これらの記事から、海水浴の場面を構想した可能性はあるのではないだろうか。

最後に「三」について見ていく。まず記事を参考にしたと考えられるのが、次の一文である。

・埠頭事務所の七階のビルディングの隣には之も同じく七階位になるらしい、厖大な建物の鉄骨が足場に支へられて高々と組立てられて居た。

この一文の参考資料と考えられるのが、「満鉄用度事務所／新築工事大いに進捗す」という、六月二八日付朝刊の記事である。

・満鉄の用度事務所は今度大連埠頭に移転すべく新築工事中の処七、八分通り鉄筋コンクリート工事を終つたが、新館は総建坪約二万三千平方米の五階建、五階を事務所に充て他は倉庫とし、

「七階」と「五階」の違いはあるが、この工事を参考にしているといえるだろう。

そして、もう一箇所記事を参考にしたと考えられるのが、この場面である。

・此の地方の主要工業製品である豆粕や豆油が、近来、外国のそれに、圧倒されてきたこと。殊にドイツの船などは、直接此の港から大豆のまゝを積んで本国の工場に持ち帰つて了ふこと。それに第一、肥料としての豆粕が、近頃は已に硫酸アンモンにとつて代られて居ること。こんなことを彼等苦力が知ろう筈はない。七月に入つてから、このD市内の、バタ〳〵閉鎖して行つた油房の最後まで残つて居たS油房が昨日の朝閉ぢることになつたとき、彼等は全く途方に暮れて了つた。

この場面の参考資料と考えられるものとして、まず第一に挙げられるのが、七月十七日付夕刊の「ドイツ貨物船／続々大連に入港／満洲特産物を積出す」という記事である。

・いま、大連の港を上から覗いたら一寸驚くに違ひない、港に就いてゐるその過半の船は煙突に紅白黒の鉢巻をさせたノースジャーマンロイドの船か、又は戦後の創

痍全く癒えて東洋進出に極度の努力を払つてゐるハンブルグ、アメリカンラインの巨大な独逸船であるからである従つてこの月初めから日本の船より寧ろ外国船の入港が多いと云はれてゐるのも無理からぬ話である灰色に船側を塗つた大きな腹の中にドシ〳〵満洲特産の大豆、豆粕が積み込まれて行く……

更に、七月十八日付朝刊には、「満洲特産物を積出しに／続々大連港に横づけされる独逸船」という見出しで、ドイツの貨物船の写真が掲載されている。[八]

続いて挙げられるのが、七月二八日付夕刊にある「満州特産界の脅威／硫安工業の発達／近年著しい其の需要増加趨勢に／豆粕の需要益減少」という記事である。

・即ち近年硫安工業は世界的に著しい発達を遂げた結果同系肥料である豆粕に比し肥料価値の高いに拘らず、価格においては却つて割合であると云ふので豆粕の領域は漸次硫安に浸されつゝある状態にある

そして、油房の閉鎖については、五月二一日付夕刊に、「豆粕の生産高激減／昨年同期の半分以下／操業工場も著しく減少を示す／青息吐息の各油房」という記事がある。

・操業工場も上旬迄は三十軒内外であつたものが二十一軒となり一日の生産高も三万枚台に減少し原料大豆高と内地安の挟撃を受けて青息吐息の有様である[九]

また、六月一日付夕刊にも、「大連油房の／操業益々不振／豆粕、豆油生産高共に減少す」という記事があり、その中で「操業工場の如きも本月上旬迄は三十軒内外であつたものが下旬に至つては二十軒に満たず」と書かれている。その後も、この業界は不振が続いたらしく、十月十七日付夕刊の「豆粕豆油輸出税／全免を嘆願／同時に大豆輸出税微増も／満洲油房の甦生策」という記事にも、「満洲の油房工業界は最近極度に疲弊し営業者の破産多く之に従事する工人の失業者も続出する状態である」と書かれている。

しかしながら、本文にあるような、大連市内の油房が全て操業停止になった、という記事は見当たらない。また、本文では「全く途方に暮れて了つた」「六月から十月迄、――之が此の港でいふ所の閑散期であつた」とあり、実際、六月二三日付夕刊には「最近の海運界／愈よ夏枯閑散期」という記事、七月二一日付夕刊には「大連港の昨今／全く夏枯期／露支断絶の影響も／目下の所殆どない」という記事が見られる。

ところが、八月二五日付朝刊には、それとは全く正反対の「豆粕大豆の廻送／昨年の四倍／大連埠頭の大繁忙」という記事がある。この活況の原因については、記事の冒頭で「露支国交の悪化によつて多忙を極めてゐるのは大連埠頭である」と書かれている。つまり、七月二一日の時点で

は殆ど影響が無かったのが、八月以降になってその影響が出たのである。更に、この記事では「最近では苦力の手不足と云ふ珍現象を呈し」とも書かれているのである。

従って、この場面では、〈悲惨な状況にある苦力〉像を作り上げる為に、実際には操業数が減少しただけの大連市内の油房を、全てが閉鎖したと改変し、八月以降に生じた、苦力の手不足という事実を取り上げなかった、と考えられるのである。

以上、各章ごとに、本文と「満洲日報」の記事との関係について見てきた。その記事に依拠する割合は各章によって異なり、また引用のレベルも様々であるが、少なくとも、この「満洲日報」が「D市七月叙景(一)」の主要な題材であった事は間違いないだろう。

二、「満洲日報」の性格

では、この「満洲日報」という新聞は、どのような新聞なのか。先にも取り上げた『日本新聞年鑑・昭和五年版』には、次のような記述がある。

・然しながら、本紙（引用者注・満洲日報）は満鉄の機関紙なるが為に経営の堂々たる半面に御用紙として政党に累され政界の変動毎に社長以下高級幹部の更迭を余儀なくされる弱点がある。

このように、「満洲日報」とは、満鉄の御用新聞という性格を持っているのである。

では、この事実は何を意味する事になるのか。それは、満鉄総裁、或いは満鉄社員に関する記事が数多く掲載されている、という事である。それは同時に、それらに関する記事を抽出するのが容易である事を示しているといってよいだろう。また、大連にも数多く存在していた事を示す様に、苦力に関する記事も随所に見られる。つまり、これらに関する資料を集めるのに、非常に便利な新聞といえるのである。

それぞれの記事を挙げてみると、まず満鉄総裁に関するものは、特に多く見られる。例えば、前章で本文に引用された山本総裁の挨拶を紹介したが、それと同様の記事（挨拶や演説、談話など）は、六月二一日付朝夕刊、七月四日付朝夕刊、七月十日付朝刊、七月二一日付朝夕刊、七月二二日付夕刊など、数多く見られる。また、その業績を称える記事も、七月十四日付朝刊や八月十五～十七日付朝刊に見られる。更に、その行動は逐一報道されており、「上京」「東上」といった言葉と共に、「山本総裁」或いは「山本社長」（本文中に「会社でも此処は社長とはいはない」とあるが、満鉄の社長を総裁と改称したのは、昭和四年六月二一日である(一〇)）という見出しが随所に登場するのである。

次に、満鉄社員についての記事であるが、主人公のポストとして設定されている「社員倶楽部の書記長」に関する記事は、残念ながら見当たらない。[一一] しかしながら、社員の個人名や部署名は、数多く見られるのである。

まず、社員の個人名については、七月六日付夕刊の「保々社員会幹事長」、七月十六日付朝刊と七月十八日付夕刊の「満鉄衛生研究所員西村治雄氏」、七月十七日付夕刊と七月十九日付朝刊の「満鉄々道部次長佐藤俊久氏」、七月十八日付夕刊の「満鉄農務係黒沢謙吉氏」、そして七月二六日付朝刊の「満鉄々道部人事主任伊藤真也氏」が挙げられる。

続いて、これ以外に見られる部署名としては、七月九日付夕刊の「満鉄調査課産業係」、七月十八日付夕刊の「満鉄商工課」、七月二七日付夕刊の「満鉄販売課」が挙げられる。そして、先程「社員倶楽部の書記長」に関する記事は見当たらない、と述べたが「社員倶楽部」という名称は見る事が出来る。[一二] それは、六月八日付夕刊、六月十日付夕刊、八月十五日付朝刊である（ただ、六月八日・十日付夕刊には「鉄仮面」という映画の、八月十五日付朝刊には長唄演奏会の後援として見えるものであり、記事の中に登場する訳ではない）。

このように、満鉄社員に関する記事も、数多く見られるのである。

最後に、苦力に関する記事については、六月十九日付朝刊の「全満に使傭する苦力の／需給及賃金統制策」（ちなみに、この記事の中で、大連埠頭の苦力は一万人であると書かれている）、七月九日付夕刊の「山東苦力減少」、七月十六日付夕刊の「製鉄所の苦力／厳選取締の要あり」、八月四日付夕刊の「逆送貨物で／繁忙の寛城子駅／苦力の狩集めに懸命」、八月十日付夕刊の「電園下建築場の／苦力罷業す」などが挙げられる。特定の人物についての記事は見られないが、「苦力」は、このようにしばしば見出しに登場するのである。

以上、「満鉄総裁」「満鉄社員」「苦力」に関する記事について見てきたが、これによって「満洲日報」がいかにこれらに関する記事を集めるのに非常に便利な新聞であるかが分かるのではないかと思う。

三、「D市七月叙景㈠」とは

これまで「満洲日報」と「D市七月叙景㈠」の比較、或いは「満洲日報」という新聞の性格についての考察を行ってきたが、では、それらの作業を通じて、「D市七月叙景㈠」を、どのような作品として位置付けられるのだろうか。

まず一章において、新聞記事と本文を比較し、各章ごとに引用のレベルも依拠する割合も様々である事を指摘した

が、これを見ていくと、「三」の苦力の造形にこそ改変が認められるものの、「辞任の挨拶の草稿」をはじめ全般として記事をほぼそのまま引用しているのが分かる。これは裏を返せば、それ以外を創作部分として注目する必要がある、という事である。章ごとでいえば、「一」は、シャックリに苦しむ姿や社史に名を残す事に心を砕いている点といえる。「二」は、これは依拠する割合が少ないので、ほぼ全体がこれに相当するといってよいだろう。そして「三」は、市場における無銭飲食の場面といえるだろう。

では、これらの創作部分が、どのような意図を含んでいるものと考えられるのか。鷺氏は「ドッシリと根を下した安定とは無縁の、綱渡りのような生活、内に常に崩壊と転落の危険をはらんだありよう」が各章に描かれている、と論じているが、果たしてそのように捉えられるであろうか。

まず「一」の創作部分は、満洲における最高権力者の戯画化であると考えられるが、[三]それが「安定とは無縁の、綱渡りのような生活」を描いているといえるだろうか。確かにY総裁は「辞任の挨拶の草稿」中にあるように、政変によって辞職に追い込まれている訳であり、その意味においては「安定とは無縁」といえるだろう。しかしながら、創作部分が、そのような状況を際立たせているとも考えにくい。ここは、あくまでも最高権力者といえども社史に名を残す事に齷齪し、シャックリには手も足も出ないという内実をユーモラスに描いたもの、と捉えられるのではないだろうか。

続いて「二」であるが、これも「此の苦しい生活から逃げる様に満洲に飛び立つたのであつた」という一文からは、確かに「綱渡りのような生活」にあった事を感じさせる。しかし、それはあくまでも過去の話である。M社の社員となった現在の生活については、このように語っている。

- 内地で、一生、いくら勤めた所で、とても、今の自分位の生活(くらし)はできなかつたらうに、と、彼自身時々、非常な満足を以て考へて見る程だつた。

明らかに「綱渡りのような生活」とは無縁といえるだろう。更に、本文は次のように続く。

- 併し、ずつと不如意な生活に慣れてきた者は、幸福な生活にはいつてからも、そんな幸福にほんとに自分が値するかどうかを臆病さうに疑つて見るものだ。そして、更に滑稽なことに、その幸福の保証のために、時々小さな心配や苦労をさへ必要とすることもあるのである。

ここから見えてくるのは、満州に来て手に入れた幸福に戸惑いながらも、それを受け止めて平和に暮らしている姿といえるだろう。七月二八日付夕刊の「団体めぐり」とい

う記事には、「在満邦人の半数を占むる十万人近くの満鉄社員（家族を合せ）」とある。このような境遇にあった満鉄社員も、恐らくはいたのではないか。現状に不満を持つ事も無い〈中流階級の一家族〉の姿を、満洲の一側面として描いたのが、「二」ではないだろうか。

そして最後に「三」であるが、ここは記事を改変して、苦力の悲惨な状況をを強調している訳であり、その点においては「綱渡りのような生活」を描いたものといえるだろう。しかしながら、無銭飲食の場面についてはどうか。その場面の最後には、このような描写がある。

・彼等はいい気持になつて居た。なぐられた節々のいたみを除けば、凡てが満ち足りた感じであつた。腹は張つて居るし、アルコホルは程よく全身に廻つて居る。一体、之以上の何が要らう？（傍点は原文）

ここから、苦しみに喘いでいる苦力の姿は見えてくるだろうか。というよりは、そのような状況にありながらも、何処か楽しげな姿が見えるのではないか。油房の完全閉鎖によって失業に追い込まれ、無銭飲食をして袋叩きにされるという悲惨な状況にありながらも、「凡てが満ち足りた感じ」になれる、ある意味逞しいといってもよい苦力の姿、これが「三」には描かれているのではないだろうか。

このように、「綱渡りのような生活」が描かれているような一面もあるが、創作部分に注目した結果見えてくるのは、「一」では最高権力者でありながら、様々な事に頭を悩まされているM社総裁の姿、「二」では、ようやく手に入れた幸福に戸惑いながらも、それを受け止めて不満を持つこともなく生きているM社社員の姿、そして「三」では、悲惨な状況にありながらも、逞しく生きている苦力の姿である。果たしてこの三章を「ドッシリと根を下した安定とは無縁の、綱渡りのような生活、内に常に崩壊と転落の危険をはらんだありよう」が描かれている、或いは佐々木氏の言われるような「現実批判」というテーマで括る事は可能だろうか。

それよりも、「満洲日報」という新聞を題材にして、上層・中層・下層階級を象徴する人物を抽出し、それぞれにテーマを設定して描いた作品、と捉えるべきではないだろうか。一見すると〈満洲体験〉によって成立した作品なのであるが、その内実はあくまでも資料を元にして成立した作品なのである。

おわりに

以上、「満洲日報」を視座として、この作品について考察してきた。作者自身の植民地体験を一歩離れて把握し、満洲なり朝鮮なりといった植民地をどのように捉えていた

のか、それを客観的に見ていく事が、植民地を舞台とする作品について考えていく上で必要なのではないだろうか。

注

（一）佐々木充「一高時代の習作」（「帯広大谷短期大学紀要」九号・昭和四七年三月）

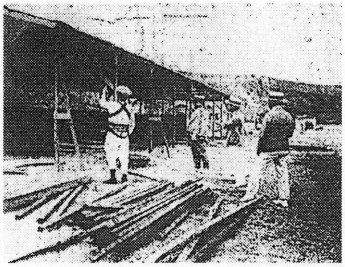
（二）鷺只雄「中島敦の青春――一高時代の初期の作品――」（「都留文科大学国文学論考」二五号・平成元年三月）

（三）京橋区瀧山町八に、東京支局があった。ちなみに本社は大連市東公園町二十一番地である。

（四）「実務化経済化」「事業整理計画」「三大工業計画」「港湾海運事業」「鉄道敷設計画」「社員待遇改善」「満蒙権益保持」の七項目で構成されている。

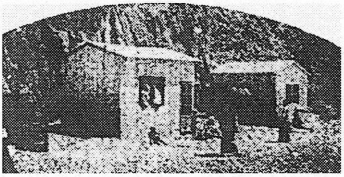
（五）七月二三日付夕刊の「満洲里の露支両軍／十町の間隔で対峙／開戦の危機刻々迫る」、七月二五日付夕刊の「綏芬方面の両軍／薄気味悪い対峙」などがある。

（六）

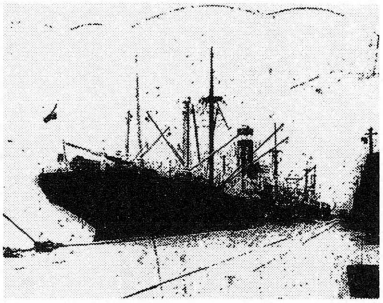


竣工を急ぐ　貝砂湾海水浴場

（七）



（八）



滿洲特産物を積出しに
殺々大連港に繋づけされる高粱船

社長ハ副総裁ヲ命ゼラレタルモノトス、但シ其任期ハ各社長又ハ副社長ヲ命ゼラレタルトキヨリ之ヲ起算ス

（一一）「社員倶楽部」の内実については、現在のところまだ不明である。七月二八日付夕刊の「満鉄社員会幹事会」という記事の中に「満鉄社員会幹事会は廿七日午後三時より社員倶楽部に於いて開会」、また八月十一日付夕刊の「現金買の大綱／委員会で決定／交渉委員も選定」という記事の中にも「満鉄社員会の生活改善委員会は既報の如く九日午後三時より社員倶楽部にて開催」とある。従って、「社員倶楽部」という名の建物があった事は推測されるが、その中に「社員倶楽部」という名の団体の事務所があった、などといった事実は見当たらず、また後述している、映画や長唄の後援として見えている「社員クラブ」との関係も不明である。これに関しては、稿を待ちたい。

（一二）六月十日付夕刊にみえる「社員クラブ」。

ダグラスの「鐵假面」
愈よ十、十一日の兩夜封切

會費　午後七時半より滿鐵協和會館で
一般一圓五十錢、讀者九十錢（割引券）
尚一般大衆券は十日午前九時より滿鐵社員クラブで發賣します

主催　滿洲日報社
後援　大連市滿鐵社員クラブ

（九）この記事の別の箇所に「三泰油房」という油房の名前が書かれており、本文にある「S油房」はここから発想された可能性がある。

（一〇）六月二十日付夕刊に「満鉄社長を総裁に／副社長を副総裁に改称／本日公布＝廿一日から実施」という記事があり、その中で、名称変更の勅令と附則が書かれている。その内容は、次のようなものである。

・朕明治卅九年勅令第百四十二号南満洲鉄道株式会社ニ関ススル件中改正ノ件ヲ認可シ茲ニ之ヲ公布セシム
・本令ハ昭和四年六月二十一日ヨリ之ヲ施行ス
本令施行ノ際現ニ南満洲鉄道株式会社ノ社長又ハ副社長ノ職ニ在ルモノハ別ニ辞令書ヲ用ヒズ社長ハ総裁ヲ、副

（一三）鷺氏も、「『南満洲の王様の戯画』を提示するところに狙いがある。」とは述べておられる。